

No.	大分類	小分類	解説
			<p>現在形は次のようなことを表します。</p> <p>①現在の習慣や状態</p> <p>②常に変わらないこと</p> <p>always / usually/ sometimes / often などの副詞と共に使われていることも多く、ヒントにすることができます。</p> <p>◆ It takes 時間 to V「Vするには～(時間)かかる」</p> <p>過去形は過去の行為や状態などを表す際に使います。</p> <p>ここでは文末に in 1968 という過去を表す副詞があるので過去形を選びます。</p> <p>現在完了形が過去の副詞と一緒に使えないという点も確認しておきましょう。</p> <p>また、could win だと「取ろうと思えば取れた」というようなニュアンスになり、実際に行った行為に対しては使いません。</p> <p>未来形は文字通り未来の行為を表します。</p> <p>ここでは in the near future「近い将来」とあるので未来形を選びます。</p> <p>◆ carry A out「Aを実行する」</p> <p>過去進行形は過去のある時に行っていたことを表します。</p> <p>狭い期間のことが多く、「ピンポイントでこの時に何をやっていた」という使われ方をします。</p> <p>ここでは when she came to London「彼女がロンドンに来たころ」というピンポイントの期間に何をしていたかを表しています。</p>
1	時制	現在形	
2	時制	過去形	
3	時制	未来形	
4	時制	過去進行形	

未来進行形は次のようなことを表します。

- ① 未来のある時点での進行中の動作
- ② 未来の予定

①は知っている人も多いでしょうが、②は意外と知られていません。

ここでは②の予定の意味で使われています。

5 時制 未来進行形

◆ in ~「あと～分・時間後に」

状態動詞は進行形にはしません。

動詞には動作動詞と状態動詞がありますが、状態動詞は進行形にすることが出来ません。

状態動詞とは know「知っている」have「持っている」belong to「所属している」などの状態を表す動詞です。

6 時制 進行形にしない動詞

「知っている」という日本語で考えると進行形にしたいくなりますが、それは誤りです。

◆ for ~「～の間」

◆ since ~「～以来」

などのまとまりは完了形の継続の用法と共によく使われます。

ここも ever since で「～以来、(今日まで)ずっと」という現在までの継続を表しています。

had engaged などの過去完了形は「過去のある時点までずっと」という意味なので、ここでは時制が合いません。

7 時制 現在完了形

未来完了形は「未来のある時点までの完了・経験・継続」を表します。

ここでは by tomorrow morning「明日の朝までに」が未来のある時点として機能しています。

8 時制 未来完了形

report は「報道する」という意味なので、主

語が the incident「事件」の場合には受け身にする必要があります。

- 過去完了形は「過去のある時点までの完了・経験・継続」を表します。
ここでは when he graduated ~「卒業した時」が過去のある時点として機能しています。
- 9 時制 過去完了形/大過去
- ◆ publishing company「出版社」
 - ◆ have been to A ①「Aに行ったことがある」
②「Aに行ってきたところだ」
 - ◆ have gone to A「Aに行ってしまった(今ここにはいない)」
- この二つの区別は重要です。
ここでは「30以上の国に行ったことがある」が自然な意味なので has been to を選びます。
完了形が継続の意味を取るとき、しばしば have been doing という進行形が使われます。
ここでも for three hours「三時間」という副詞が示すように継続の用法で使われています。
is struggling では「今している」という意味にはなりませんが、「三時間」という幅のある時間は表すことはできません。
- 10 時制 been to/gone to
- 11 時制 現在完了進行形

- 時と条件の副詞節では、未来の内容も現在形で表します。
- 時と条件の副詞節とは、when / if / before / after / until などが作る副詞節のことです。ここでは after 以下の内容は「ロンドンで閉幕したら」という未来のことを言っていますが、このような場合にも現在形を使うというのがこのルールです。
- be + done は「～される」という受動を表します。
- ここでは動詞の主語が a major order「大口の注文」なので、cancel「～をキャンセルする」との関係を考えれば「注文がキャンセルされる」という受け身にしなければなりません。
- will be cancelled も受動態ですが、ran into a big trouble「トラブルに陥った」という主節の過去時制と合いません。
- 受動態と助動詞が同時に使われる時には次のような語順になります。
- ◆ 助動詞 + be + done
- ここでは can be reached で「到着することができる」という可能の意味を含む受動態を作っています。
- 受動態と完了形が同時に使われる時には次のような語順になります。
- ◆ have + been + done
- ここでは主語がパナマ運河なので、動詞の renovate「～を改修する」との関係を考えれば「運河が改修される」という受け身にしなければなりません。
- ◆ vessel「船」
- | | | | |
|----|-----|----------|--|
| 12 | 時制 | 時と条件の副詞節 | |
| 13 | 受動態 | 受動態の基本 | |
| 14 | 受動態 | 助動詞+受動態 | |
| 15 | 受動態 | 完了形の受動態 | |

受動態と進行形が同時に使われる時には次のような語順になります。

◆ be + being + done

ここでは主語が problem「問題」なので、動詞の discuss「～を議論する」との関係を考えれば「問題が議論される」という受け身にしなければなりません。

16 受動態 進行形の受動態

群動詞(イディオム)の受動態は「バラさない」というルールがあります。例えば、

◆ take care of A「Aを世話する」⇒ A is taken care of「Aは世話される」

など、群動詞はそのままの形を保ったまま受動態にされます。この問題の群動詞は

◆ pay attention to A「Aに注意を払う」ですが、これには二通りの受動態があります。

① A is paid attention to「Aは注目されている」

② Attention is paid to A「Aは注目されている」

ここでは②の受動態が問われており、この場合にはふつう special などの形容詞が attention に付いています。

17 受動態 群動詞の受動態

know の受動態は前置詞によって様々な意味になります。

◆ be known to A「Aに知られている」

◆ be known for A「Aのことで知られている」

◆ be known as A「Aとして知られている」

◆ be known by A「Aで判断される」

ここでは自然な意味になるのは for だけです。

18 受動態 by 以外の受動態

- ◆ cannot ①「～できない」②「～のはずがない」
- ここでは②の推量の意味が問われています。
- 19 助動詞 cannot
- ◆ liberal democracy「自由民主主義」
- ◆ must ①「～しなければならない」②「～に違いない」
- ここでは①の義務の意味で使われています。
- 英語では責任を負うことを shoulder responsibility「責任を負う(背負う)」と表現します。
- 20 助動詞 must
- ◆ must 「～しなければならない」
 ≒ have to「～しなければならない」
- ◆ must not「～してはいけない(禁止)」
 ≠ don't have to「～しなくても良い」
- must not と don't have to の違いはよく聞かれるものです。
- ここでは文意を考えれば「慌てる必要が無いように」が自然なので don't have to を選びます。
- must not/don't
- 21 助動詞 have to
- ◆ so that「～するように」
- ◆ should ①「～すべきだ」②「～のはずだ」
 = ought to
- ここでは②の「～のはずだ」という意味で使われています。
- 問題文は「隗より始めよ」の英語版といったところです。
- 22 助動詞 should

◆ should ①「～すべきだ」②「～のはずだ」
= ought to

否定形はそれぞれ以下の通りです。

◆ should not
= ought not to

23 助動詞 ought to

need not には to は不要です。

◆ need not「～する必要はない」
= don't need to

ここでは二文目に「自分で面倒を見られる」とあるので、「心配する必要はない」となるように need not を選びます。

24 助動詞 need not

have to や must は「～しなければならない」という意味です。

◆ will not「～しようとしなない」
◆ would not「～しようとしなかった」

この用法での will は話し手の「意志」を表します。他の選択肢は以下の通りです。

◆ must not「～してはいけない」
◆ used to「よく～したものだ」

25 助動詞 would(意思)

What are you up to? で「今何しているの?」という意味になります。

◆ would rather V1 than V2「V2 するならむしろ V1 したい」

という助動詞の表現です。

26 助動詞 would rather

この問題のように絶対にしたくないことを大げさに表すために使われることもあります。

		◆ would rather「むしろ～したい」 ⇒否定 would rather not「むしろ～したくない」
		◆ had better「～した方がよい」 ⇒否定 had better not「～しない方がよい」
27	助動詞 had better not	この二つは not の位置がよく問われます。 ◆ used to ①「よく～したものだ」 ②「むかしは～だった」
28	助動詞 used to/would often	used to は過去の習慣や状態を表します。 形を正確に覚えましょう。 過去推量の表現が問われています。 ◆ may have done「～したかもしれない」 ◆ must have done「～したに違いない」 ◆ cannot have done「～したはずがない」 ◆ should have done「～すべきだった」 ◆ should not have done「～すべきではなかった」 ◆ need not have done「～する必要はなかった」
29	助動詞 must have done	代表的なものは以上の通りです。 文意を考えて適切なものを選びましょう。 過去推量の表現が問われています。 ◆ may have done「～したかもしれない」 ◆ must have done「～したに違いない」 ◆ cannot have done「～したはずがない」 ◆ should have done「～すべきだった」 ◆ should not have done「～すべきではなかった」 ◆ need not have done「～する必要はなかった」
30	助動詞 cannot have done	代表的なものは以上の通りです。 文意を考えて適切なものを選びましょう。

過去推量の表現が問われています。

- ◆ may have done「～したかもしれない」
- ◆ must have done「～したに違いない」
- ◆ cannot have done「～したはずがない」
- ◆ should have done「～すべきだった」
- ◆ should not have done「～すべきではなかった」
- ◆ need not have done「～する必要はなかった」

代表的なものは以上の通りです。

文意を考えて適切なものを選びましょう。

31 助動詞 should have done

- ◆ impressive「印象的な、素晴らしい」

過去推量の表現が問われています。

- ◆ may have done「～したかもしれない」
- ◆ must have done「～したに違いない」
- ◆ cannot have done「～したはずがない」
- ◆ should have done「～すべきだった」
- ◆ should not have done「～すべきではなかった」
- ◆ need not have done「～する必要はなかった」

代表的なものは以上の通りです。

文意を考えて適切なものを選びましょう。

32 助動詞 should not have done

- ◆ available「利用・入手可能な」
- ◆ thoroughly「徹底的に」

過去推量の表現が問われています。

- ◆ may have done「～したかもしれない」
- ◆ must have done「～したに違いない」
- ◆ cannot have done「～したはずがない」
- ◆ should have done「～すべきだった」
- ◆ should not have done「～すべきではなかった」
- ◆ need not have done「～する必要はなかった」

代表的なものは以上の通りです。

文意を考えて適切なものを選びましょう。

33 助動詞 need not have done

◆ have been to「～に行ったことがある」
普通に「病院に行く」という行為を表すには go to を使います。

◆ cannot ~ too much「～してもしすぎることはない」

この構文は「いくら注意してもしすぎることはない」や「強調してもしすぎることはない」といった意味で使われることが多いです。

この問題では目的語が長いので、too much が動詞の直後に来ています。

34 助動詞 cannot too much

◆ influence on A「A に対する影響」
◆ literature「文学」

◆ 仮定法過去:内容は現在

If S V カコ, S would/could/might V.

「もし～すれば、...するだろう」

◆ 仮定法過去完了:内容は過去

If S had done, S would/could/might have done.

「もし～していたら、...していただろう」

◆ 仮定法過去完了 + 過去:過程は過去、
帰結は現在

If S had done, S would/could/might V.

「もし(あの時)～していたら、(今頃)...する
だろう」

仮定法は時制に注目すること、そしてフォー
マットを覚えることが重要です。

ここでは帰結節(主節)に would realize とい
う形があるので仮定法過去の形を選びま
す。

35 仮定法 仮定法過去

◆ 仮定法過去:内容は現在

If S V カコ, S would/could/might V.

「もし～すれば、...するだろう」

◆ 仮定法過去完了:内容は過去

If S had done, S would/could/might have done.

「もし～していたら、...していただろう」

◆ 仮定法過去完了 + 過去:過程は過去、
帰結は現在

If S had done, S would/could/might V.

「もし(あの時)～していたら、(今頃)...する
だろう」

36 仮定法 仮定法過去完了

仮定法は時制に注目すること、そしてフォー

マツを覚えることが重要です。
ここでは条件節に had taken という形がある
ので仮定法過去完了の形を選びます。

◆ 仮定法過去: 内容は現在

If S V カコ, S would/could/might V.
「もし～すれば、...するだろう」

◆ 仮定法過去完了: 内容は過去

If S had done, S would/could/might
have done.
「もし～していたら、...していただろう」

◆ 仮定法過去完了 + 過去: 過程は過去、
帰結は現在

If S had done, S would/could/might V.
「もし(あの時)～していたら、(今頃)...する
だろう」

仮定法は時制に注目すること、そしてフォー
マツを覚えることが重要です。

ここでは条件節に had bought という仮定
法過去完了の形がありますが、帰結節(主
節)を見ると最後に now とついています。
そこから仮定の内容は過去であるものの、
帰結の内容は現在のことを言ってるのだと

判断して、三つ目の仮定法過去完了 + 過去の形を選びます。

◆ If S were to do, S would do.

「仮に～したら、...するだろう」

◆ If S should do, S would/will do.

「万が一～したら、...するだろう」

38 仮定法 were to

仮定法未来と呼ばれる表現が問われています。

◆ If S were to do, S would do.

「仮に～したら、...するだろう」

◆ If S should do, S would/will do.

「万が一～したら、...するだろう」

39 仮定法 should

仮定法未来と呼ばれる表現が問われています。

should の方は仮定法でも使われますが、この問題のように直説法でも使われます。

- ◆ I wish S did「(今)～したらなあ」
= If only S did
- ◆ I wish S had done「(あの時)～していたらなあ」
= If only S had done
- 40 仮定法 wish
- という仮定法の表現です。
選択肢の中で仮定法を取れるのは wish のみです。
- ◆ I wish S did「(今)～したらなあ」
= If only S did
- ◆ I wish S had done「(あの時)～していたらなあ」
= If only S had done
- 41 仮定法 If only
- という仮定法の表現です。
- ◆ It is time S did「そろそろ～する時間だ」
- 42 仮定法 It is time
- という表現が問われています。
- ◆ agenda「議題」
- ◆ item「項目」
- ◆ as if(though) S did「まるで～するかのよう」
- ◆ as if(though) S had done「まるで...したかのように」
- 43 仮定法 as if
- という仮定法の表現が問われています。
空所後の really were という時制がヒントになっています。
- ◆ If it were not for A「もし(今)A がなかったら」
= But for A = Without A
- ◆ If it had not been for A「もし(あの時)A がなかったら」
= But for A = Without A
- 44 仮定法 if it were not/if it had not been

仮定法で「～がなかったら」という時には上記のような決まった表現があります。

◆ If it were not for A「もし(今)A がなかったら」

= But for A = Without A

◆ If it had not been for A「もし(あの時)A がなかったら」

= But for A = Without A

45 仮定法 But for/Without

仮定法で「～がなかったら」という時には上記のような決まった表現があります。

仮定法では [if の省略 + 倒置] が起こることがあります。

if を省略すると、S と次の一語が入れ替わるというのがそのルールです。

ここでは次のような倒置が行われています。

If something bad should happen「万が一何か悪いことが起こったら」

⇒ should something bad happen

46 仮定法 倒置 Should S V

他の選択肢では文法的に成立しません。

仮定法では [if の省略 + 倒置] が起こることがあります。

if を省略すると、S と次の一語が入れ替わるというのがそのルールです。

ここでは次のような倒置が行われています。

if it had not been for Louis Armstrong「もしレイ・アームストロングがいなかったら」

⇒ had it not been for Louis Armstrong

47 仮定法 倒置 Had it not been for

他の選択肢では文法的に成立しません。

- otherwise も仮定法で使われることがあります。
- ◆ 現在の内容 + otherwise S did「そうでなければ～するだろう」
- ◆ 過去の内容 + otherwise S had done「そうでなければ～していただろう」
- 48 仮定法 otherwise 疑問詞 + to do で名詞のかたまりを作ることができます。
- ◆ how to do「～の仕方、方法」
- ◆ what to do「何を～Vすべきか」
- ◆ who to do「誰を～すべきか」
- ◆ when to do「いつ～すべきか」
- ◆ where to do「どこで～すべきか」
- 49 不定詞 疑問詞 to V などの表現があります。
- 仮目的語を使った表現が問われています。
- ◆ find it ~ to do「～することが～だと分かる」
- ◆ make it ~ to do「～することを～にする」
- などがよく使われます。
- ここでは it は to do の内容を受けています。
- 他の選択肢では to do の内容を受けることが出来ません。
- 50 不定詞 仮目的語

不定詞は後ろから名詞を修飾することができます。

その際、修飾される名詞が不定詞に含まれる動詞や前置詞の目的語になるように文を作ります。

ex) something to drink「飲み物」⇒

something to drink (it)

something to write with「筆記用具」⇒

something to write with (it)

ここでは「誇りに思うべきもの」という内容だと推測できるので次のような形を作ります。

◆ something to be proud of ⇒ something to be proud of (it)

be proud of「～を誇りに思う」という表現が下敷きになっています。

◆ S is hard/easy to do.「S は～するのが困難/簡単だ」

という不定詞を使った構文が問われています。

hardly は「ほとんど～ない」という副詞なので、ここでは不適切です。

不定詞の副詞的用法には結果を表すものがあります。

◆ ～, only to do「～したが、結局...する」

◆ ～, never to do「～して、二度と...しない」

◆ live to be A「A 歳まで生きる」

◆ grow up to be A「成長して A になる」

他の選択肢も不定詞の表現ですが、ここでは意味が通りません。

51 不定詞 形容詞的 (前置詞付き)

52 不定詞 A is ～ to V

53 不定詞 副詞 結果

過去の内容を表します。

◆ seem to do「～するように思われる」

省略を行う際に不定詞の to の部分を残すことを代不定詞といいます。

ここでは以下のような省略が行われています。

though he had been told not to (open the mysterious box)

tell の語法も確認しましょう。

◆ tell O to do「O に～するように言う」

⇒ S is told to do「S は～するように言われる」

いわゆる too to 構文を問う問題です。

◆ too ~ to do「～すぎて...できない、...するには～すぎる」

また、不定詞の意味上の主語は to do の前に for S を置きます。

⇒ too ~ for S to do「～すぎて S は...できない」

◆ so ~ as to do「...するくらい～、～なので...する」

= ~ enough to do

という不定詞の表現が問われています。

◆ so ~ as to do「...するくらい～、～なので...する」

= ~ enough to do

という不定詞の表現が問われています。

さらに不定詞の否定は to V の前に not や never を置きます。

⇒ ~ enough not to do「...しないくらい～、～なので...しない」

58 不定詞 代不定詞

59 不定詞 too to

enough to/so ~
60 不定詞 as to

61 不定詞 enough not to

不定詞の副詞的用法には目的と表すものがあります。

◆ to do「Vするために」

= in order to do = so as to do

although や so that は接続詞なので、主語が必要になります。

with all は前置詞なので後ろに名詞のかたまりが来ます。

62 不定詞 in order to

◆ All S have to do is do「S は～だけすればよい」

この構文の場合は例外的に is の後に動詞の原形が来ます。

動詞の原形の代わりに不定詞が来ることもあります。

All S have to do is

63 不定詞 V

ex) All you have to do is to take a step ~.

be to 構文は主に助動詞の意味を表します。

①can ②will ③must など。

この問題では under no circumstances「どんな状況でも～ない」という否定の表現が文頭にあるので、その後に倒置が起こっています。

Under no circumstances / are you to leave

否定

+

倒置

倒置部分を元に戻すと you are to leave となり、are to が must の意味を表しています。

64 不定詞 be to

- 独立不定詞とは主に文頭にあり、副詞的に使われる表現です。
- ◆ to be honest「正直に言って」
 - ◆ to begin with「まず初めに」
 - ◆ to make matters worse「さらに悪いことに」
- 65 不定詞 独立不定詞 など様々なものがあります。動名詞はその名前の通り名詞として機能します。ここでは前置詞 of の目的語になっています。
- 66 動名詞 前置詞の目的語 不定詞にも名詞的用法はありますが、前置詞の目的語になることはできません。動名詞の意味上の主語を表す際は動名詞の前に、主語になる名詞を置きます。ここでは以下のような構造になっています。
- insisted on / the team / taking
- S
- Ving
- 67 動名詞 意味上主語 「チームが行動を取ること」を主張したという意味になります。完了形の動名詞 having done は主節よりの前の時制を表します。
- is proud of / having graduated from ~
- 現在 過去
- 「誇りに思っている」のは現在ですが、「卒業した」のは過去のことなので、having graduated という形になります。
- 68 動名詞 完了形の動名詞 動名詞の否定は Ving の前に not を置いて、not Ving という形にします。
- 69 動名詞 not の位置 from は前置詞なので you do not know のように文を続けることはできません。

◆ come close to doing「～しかける」

この表現の to は前置詞の to なので後ろには名詞が来ます。

つまり、動詞を置くときには動名詞の形にしなければなりません。

類似の表現としては以下のようなものがあります。

◆ look forward to doing「～することを楽しみにしている」

◆ When it comes to doing「～することになると」

◆ It is no use/good doing「～しても無駄だ」

= There is no point/sense (in) doing

70 動名詞 to の後の動名詞

慣用表現①「無

71 動名詞 駄だ」

という動名詞の構文が問われています。

◆ have difficulty/trouble (in) doing「～するのに苦労する」

慣用表現② 省

72 動名詞 略可能な in

という動名詞の構文が問われています。

◆ abstract「抽象的な」

◆ It goes without saying ～「～は言うまでもない」

慣用表現③ そ

73 動名詞 の他

という動名詞の構文が問われています。

分詞は形容詞として名詞を修飾します。

◆ doing「～している」

◆ done「～される」

分詞は一語の時は前から、二語以上のかたまりの時は後ろから名詞を修飾します。

excite は「～を興奮させる」という意味なので、exciting とすれば「ワクワクする」という意味になります。

74 分詞 前から修飾

◆ archaeologist「考古学者」

分詞は形容詞として名詞を修飾します。

◆ doing「～している」

◆ done「～される」

分詞は一語の時は前から、二語以上のかたまりの時は後ろから名詞を修飾します。

involve は「～を関係させる」という意味なので、involved in とすれば「～に関係している」という意味になります。

ここでは後ろから the costs を修飾しています。

75 分詞 後置修飾

◆ There is S doing「S は～している」

⇒ 進行形とほぼ同じ意味

◆ There is S done「S は V されている」

⇒ 受動態とほぼ同じ意味

という構文が問われています。

76 分詞 There is S doing/done

なお空所の後ろの that は同格で rumor の内容を説明しています。

分詞は形容詞として機能するので、SVC や SVOC の C の位置に来ることもあります。

ここでは feel C「Cのように感じる」のCに分詞が来ています。

embarrass は「～に恥をかかせる」という意味なので、embarrassed とすれば「恥をかかされた＝恥ずかしい」という意味になります。

77 分詞 SVC

分詞は形容詞として機能するので、SVC や SVOC の C の位置に来ることもあります。

ここでは leave O C「OをCのままにする」のCに分詞が来ています。

Leaving / the air conditioning / running

78 分詞 SVOC(leave/keep)

leave

O

C

「エアコンを稼働したままにしておく」

分詞は形容詞として機能するので、SVC や SVOC の C の位置に来ることもあります。

◆ 知覚動詞 O doing「O が～しているのを知覚する」

◆ 知覚動詞 O done「O が～されるのを知覚する」

という語法はよく使われるのが覚えておきたいところです。

I / saw / some of my friends / waving

S V O

C

wave は「手を振る」という意味なので

waving「手を振っている」とします。

分詞は形容詞として機能するので、SVC や SVOC の C の位置に来ることもあります。

◆ make oneself understood「自分の言っていることを理解してもらおう」

◆ make oneself heard「自分の言っていることを聞いてもらおう」

79 分詞 SVOC(知覚)

make oneself understood

80 分詞

make を使ったこれらの表現は重要なので覚えておきたいところです。

		<p>分詞構文は文頭や文末に来て、[接続詞 + S V]と同じような意味になります。</p> <p>分詞構文の主語は文の主語と一致するので、その主語が「する」のか「される」のかを考えます。</p>
81	分詞 分詞構文	<p>ここでは主語が his works「彼の作品」なので、translated「翻訳される」と考えます。</p> <p>◆ translate A into B「AをBに翻訳する」</p> <p>分詞構文は文頭や文末に来て、[接続詞 + S V]と同じような意味になります。</p> <p>またこの問題文のように主語の直後に挿入されることもあります。</p> <p>分詞構文の主語は文の主語と一致するので、その主語が「する」のか「される」のかを考えます。</p>
82	分詞 分詞構文の否定	<p>また、分詞構文を否定する際には直前に not や never を置きます。</p> <p>分詞構文の時制が主節よりも前の時は、having done とします。</p> <p>have been to the shrine「その神社に行ったことがある」という完了形の経験の用法が</p>
83	分詞 完了形の分詞構文	<p>分詞構文になったものが問題文の形です。</p> <p>◆ There being A「Aがあるので」</p> <p>分詞構文の主語が文の主語と違うときには、分詞構文の前に意味上の主語となる名詞を置きます。</p> <p>◆ It being sunny,「天気が良いので」</p> <p>◆ There being no A,「Aがないので」</p>
84	分詞 独立分詞構文	<p>などはその代表例です。</p>

慣用表現として使われる独立分詞構文もいくつかあります。

- ◆ generally speaking「一般的に言って」
 - ◆ judging from A「A から判断すると」
 - ◆ speaking of A「A といえば」
- などがあります。

85 分詞 独立分詞構文(慣用)

- ◆ beneficial「有益な」
- ◆ detrimental「有害な」
- ◆ with O C「O が C して、O が C されて」という構文が問われています。この C の箇所にはしばしば分詞が入ります。ここでは次のような構造になっています。

With / all the spectators / cheering it,
with O
C

86 分詞 With O C

- ◆ spectator「観客」
- ◆ deny doing「～したことを否定する」

87 動詞の 動名詞を目的語
87 語法 取る

他動詞の中には動名詞を目的語に取るものと、不定詞を目的語に取るものがあります。

動名詞は「すでにしていること、すでにしたこと」、不定詞は「これからすること」を表すという性質があるので、それをヒントにしつつ暗記をすると良いでしょう。

- ◆ hesitate to do「～することを躊躇する」

88 動詞の 不定詞を目的語
88 語法 取る

他動詞の中には動名詞を目的語に取るものと、不定詞を目的語に取るものがあります。

動名詞は「すでにしていること、すでにしたこと」、不定詞は「これからすること」を表すという性質があるので、それをヒントにしつつ

暗記をすると良いでしょう。

◆ suspiciously「怪しく」

◆ regret to do「残念ながら～する」

◆ regret doing「～したことを後悔する」

regret は目的語に動名詞・不定詞の両方を取り、それぞれ意味が変わります。

regret to do は何か残念な報告をする際に用いる表現です。

動名詞は「すでに行っていること、すでにしたこと」、不定詞は「これからすること」を表すという性質があるので、それをヒントにしつつ

暗記をすると良いでしょう。

◆ get O to do「Oに～させる」

という get の用法が問われています。get は他にも

◆ get O doing「Oに～させる」

◆ get O done ①「Oを～してもらう(依頼)」

②「Oを～される(被害)」

③「Oを～してしまう(完了)」

などの用法があります。

◆ have O do「Oに～させる」

という have の使役の用法が問われています。have は他にも

◆ have O doing「Oに～させておく」

◆ have O done ①「Oを～してもらう(依頼)」

②「Oを～される(被害)」

89 動詞の 動名詞・不定詞で
語法 意味が変わる

90 動詞の
語法 get O to V

91 動詞の
語法 have O V

②「Oを～される(被害)」

③「Oを～してしまう(完了)」

などの用法があります。

◆ get O done ①「Oを～してもらう(依頼)」

②「Oを～される(被害)」

③「Oを～してしまう(完了)」

という get の用法が問われています。

ここでは③の意味で使われています

get は他にも以下の用法があります。

◆ get O doing「Oに～させる」

◆ get O to do「Oに～させる」

◆ let O do「Oに～させてやる」

動詞の
92 語法 have(get) O done

let はほとんどの場合上記の用法で使われます。

Don't let / fear of failure / prevent

let O

do

という構造になっています。

◆ prevent O from doing「Oが～するのを妨げる」

動詞の
93 語法 let O V

も重要な語法です。

◆ make O do「Oに～させる」

という make の使役の用法が問われています。make は他にも

◆ make oneself understood「自分の言っていることを理解してもらう」

動詞の
94 語法 make O V

◆ make oneself heard「自分の言っている

ことを聞いてもらう」
などの表現が重要です。

知覚動詞の SVOC の語法は非常に重要です。

◆ 知覚動詞 O do「O が～するのを知覚する」

◆ 知覚動詞 O doing「O が～しているのを知覚する」

◆ 知覚動詞 O done「O が～されるのを知覚する」

see / lovers / embracing each other on a station platform.

see O doing

という構造になっています。

◆ embrace「～を抱きしめる」

◆ allow O to do「O が～するのを許可する」

⇒ S is allowed to do「Sは～するのを許可される」

という語法が問われています。同様の形をとる動詞には以下のようなものがあります。

◆ tell O to do「Oに～するように言う」

◆ ask O to do「Oに～するように頼む」

◆ want O to do「Oに～してほしい」

動詞の
95 語法 知覚 O V

動詞の
96 語法 V O to V

◆ 命令・提案・要求を表す that 節の中には省略可能な should が入る。
というルールが問われています。それを踏まえて問題を見てみましょう。

The citizens demanded that the mayor (should) ___ immediately.
demand は「要求する」という意味なので、that 節にある空所の前には should が省略されています。

動詞の
97 語法 that (should)

それが分かれば動詞の原形を選べるはずです。

「話す・言う」系動詞の語法を確認しましょう。

◆ say A「A という」

say (to A) that ~「(A に)~と言う」

◆ talk with(to) A「A と話す」

◆ speak A「A(言語)を話す」

speak to A「A に話しかける」

◆ tell O1 O2「O1 に O2 を話す」

tell O that ~「O に~と話す」

tell O to do「O に~するように言う」

動詞の
98 語法 tell/say/speak/talk

ここでは tell の最後の語法が受動態になったものが問われています。

◆ inform A of B「AにBを知らせる」

という語法が問われています。同じ形をとる動詞は以下のものがあります。

◆ remind A of B「AにBを思い出させる」

◆ deprive(rob) A of B「AからBを奪う」など。

動詞の
99 語法 A of B

動詞の
100 語法 O from Ving

◆ stop/keep/prevent O from doing「Oに
～させない」

この語法は非常に重要なので必ずおさえま
しょう。

◆ push O forward「Oを押し進める」